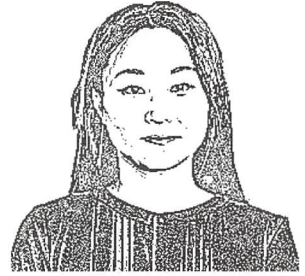

石田 知子 (いしだ ともこ)



【書名】害虫の誕生——虫からみた日本史

【著者】瀬戸口明久

【発行】筑摩書房（ちくま新書）

「ゴキブリは豊かさの象徴であったとも言われており、地域によっては駆除することが戒められていた」という、びっくりするようなエピソードから始まるこの著作は、明治時代以降、自然と人間の関係がどのように変化してきたかということ「害虫」をキーワードとして描いている。

著者によれば、江戸時代、田畑に発生する虫害は主に「たたり」であると考えられていた。一部では「注油駆除法」という効果的な対処法が知られていたものの、多くの地域ではもっぱら「虫送り」という儀礼や「駆虫札」というお札などが主な対策であり、そもそも虫害は人間の力でなんとかできるものだと思われていなかった。人間の力で駆除すべき「害虫」という考え自体が、当時は存在していなかったのだ。そのため、明治政府が諸外国から西洋科学を輸入し、効果的な害虫駆除法を導入しようとしても、肝心の農民たちからは反発され、ときには一揆にまで発展してしまう。そのような状況から、警察の動員・「害虫駆除唱歌」の作成・「害虫取り競争」など、様々な手段を使って、明治政府は当時の日本人に「害虫」という考えを広めていく。その後も、植民地の統治や戦争などを通じて、「害虫」を含む自然と私たち人間の関係はさらに変化していく。この著作では、それらの様子が様々な資料をもとに論じられている。

この本を通じて、「害虫」という私たちが普段当たり前のようになっている言葉の背後にある歴史を知り、科学技術の発展と普及が私たちの自然（とくに虫）に対する考えをどのように変化させてきたのか、思いを馳せてみてほしい。

【書名】沈黙の春

【著者】レイチェル・カーソン（青樹築一 訳）

【発行】新潮社（新潮文庫）

『沈黙の春』は、DDTをはじめとする殺虫剤・除草剤の大量散布が、生態系や私たち人間に大きな被害をもたらすことを警告した著作である。春を告げる鳥たちが姿を消し、川では魚が死んでいく。人間も例外ではなく、殺虫剤などが原因だと考えられている死亡例がいくつも紹介されている。この作品が発表された1962年当時のさまざまな痛ましい出来事が丁寧に描かれており、読んでいると心が苦しくなってくるが、科学技術の持つリスクや危険性が必ずしも認識されていなかった時代の雰囲気を感じることができる。

この著作はベストセラーとなり、様々な化学物質の法的な規制につながったとされる。カーソンの主張は、化学物質の使用を完全に禁止すべきだということではない。起こりうる結果を考えながら、慎重に散布場所や量を定めるべきだというものだ。彼女の考えは、現代の私たちに化学物質と付き合う際の態度を教えてくれる。

ただし、この著作が記されたのは60年以上前であるため、現在の科学的知見からすると注意しなければならない点がいくつかある。例えば、カーソンは薬品の大量散布に代わる害虫駆除の方法として、その土地に本来生息していない生物を他の地域から導入するという方法を勧めている。しかし、近年では外来種の導入はときに在来種に悪い影響を与えることが知られているため、そのような害虫駆除法を採用するのは好ましくない。

このような時代の制約は、カーソンの主張の価値を損なうものではない。なぜなら、彼女の主張の核にあるのは、農業などのために特定の昆虫や植物を駆除する必要があるとき、生態系に配慮して行うべきだということだからだ。生物多様性の重要性が強調される現在、このメッセージは私たちの心により強く響くのではないだろうか。古典と呼ばれる作品には、現代の問題を考えるヒントがたくさん詰まっている。『沈黙の春』を読みながら、今日の科学技術をめぐる様々な課題について考えてみてはどうだろうか。

【書名】タコの心身問題

【著者】ピーター・ゴドフリー＝スミス（夏目大 訳）

【発行】みすず書房

タコは賢いという話を聞いたことがあるだろうか。ビンの蓋を開けることができる、人間の顔を認識することができ、嫌いな人には水を吹きかけることもあるなど、印象的なエピソードはいくつもある。一方で、タコの神経系

は、賢い動物の代表である人間の神経系とは大きく異なっている。人間を含む脊椎動物の神経系では、神経細胞は脳に集中しており、脳が身体の運動を支配・制御している。しかし、タコの場合、脳だけではなく腕にも神経細胞が集中しているため、脳と身体の違いは明確ではない。そのため、タコに心があるとしたら、彼らの心は私たち人間のそれとは大きく異なるものであるはずだ。それでは、タコはどのように外の世界を感じ、どのように思考しているのだろうか？

この本では、様々な生物学的知見に基づき、タコをはじめとする頭足類の心のありかたが考察されている。著者であるピーター・ゴドフリー＝スミスは哲学者であり、この本の中で展開されているのも哲学的な議論である。タコについての哲学？ と不思議に思う人もいるだろう。しかし、私たち人間とは様々な点で異なっているであろう頭足類の心について考えることは、意識や知能という哲学のオーソドックスな問題についてより深く考える材料になる。この本は、私が紹介している他の本と比べると、少し難易度が高いかもしれない。しかし、タコやイカなどの頭足類に興味がある人はもちろん、心とは何かという問題に興味がある人の知的好奇心を、この本は強く刺激してくれるはずだ。進化の歴史の中で、頭足類を含むグループが脊椎動物を含むグループと分かれたのは約6億年前である。この本を読みながら、私たちから遠く離れた親戚である彼らの心のありかたを想像するのも面白いだろう。

【書名】 生を祝う

【著者】 李琴峰

【発行】 朝日新聞出版

世界を席卷する流行り病が収束した約50年後の日本では、同性婚や安楽死が当然の権利とされている。さらには「生まれたい権利」も認められており、胎児に「生まれてくること」への意思を確認する〈出生意思確認〉を受けることが、妊娠した人には義務づけられるようになった。万が一、〈出生意思確認〉で胎児が出生を〈拒否〉した場合、〈出生取消手術〉を受けなければならない。なぜなら、「人から命を奪う」殺人と同様に、「人に命を押し付ける」強制出生は絶対にやってはならないと考えられているからだ。

主人公である彩華は、1カ月前に妊娠手術を受けたところである。彼女自身も合意の下で生まれた子どもでもあり、辛いときは「自分は合意の下で生まれてきた」ことを心の支えにして乗り越えてきた。そのためもあってか、彩華も出生の強制は絶対にあってはならないと考えており、妻の佳織と「子供の意志は、絶対尊重しようね」と約束している。

ぎょっとするような設定であるが、このような近未来の世界で何が起きるのか、興味を持った人は実際に読んでみてほしい。読みやすい文体で書かれているし、分量もそこまで多くないので、小説にあまりなじみがない人でも通読しやすいだろう。また、近未来社会の描写自体も興味深いので、これからの社会のありかたを考えてみたい人にとっても面白いはずだ。そして何より、新しく人間を誕生させる営みそのものについてじっくり考えてみたい人は、一度手に取って見てほしい。